ロケット日和

秋坂和葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロケット日和

【Ｎコード】
Ｎ２８９５ＢＡ

【作者名】
秋坂和葉

【あらすじ】
女子校を舞台にしたトラブル解決物語。
トラブルメーカーである主人公。仲間と一緒に事件を追うが、事態は思わぬ方向へ。コメディータッチの作品です。

ロケット日和（1）

七月の空にはホイップクリームを散らしたような純白の雲が浮かんでいた。
太陽の光が夏の雲に陰影をつけている。立体的な雲は西洋の古城のような存在感を示していた。
風に揺れるショートカットの髪を押さえながら、二宮千夏（にのみやちなつ）は小さな発射台の脇に座り込んだ。

「うん、このくらいの風なら何てことないね。しっかり頼むぞ」
千夏は発射台にセットされたロケットを眺めた。
水滴を浮かべてロケットが直立している。表面を人差し指でなぞるとひんやりと冷たかった。近所で買った５００ｍｌのペットボトルに、少量の水と空気をたっぷり詰め込んだお手軽ロケットだ。発射ノズルは市販品だが、フィンは自作の品だ。
千夏はロケットの脇に胡座をかいて座った。
場所は学校の屋上のど真ん中、十階の校舎のてっぺんだ。広々としたスペースは打ち上げにはもってこいだった。千夏は台から伸びた発射レバーを握り、カウントダウンを始めた。
「3、2、1、……」
精一杯ゆっくりと数字を読み上げる。そしてカウントが終わった後、千夏は大きく息を吸い込んで叫んだ。
「イグニッション！」
発射レバーを引くと、水がはじけ飛ぶ派手な音が聞こえた。
ロケットは水しぶきをあげながら高々と上空に舞い上がっていった。青空から振ってくる水滴を払いながら、千夏はガッツポーズを決めた。
「よ～しっ！　ナイスロケット！」
千夏が拳を握っていると、突然後ろから頭を叩かれた。

「何がナイスロケットだ、このバカ！」
「痛たた……。何だよ、人がせっかく楽しんでるのに」
千夏が振り返ると、そこには天王台奈留（てんのうだいなる）が立っていた。
「全校集会を堂々とサボって何やってんだ！　みんな体育館に集まってるぞ」
「何言ってんの奈留。だからだろ？　みんなが留守にしている今しか思いっきり飛ばせるチャンスはないじゃない。見なよ、この惚れ惚れするような青空。まさにロケット日和。何か新しい事が始まりそうな予感に満ちているよね」
千夏は空を仰いだ。
上空に広がるのは透き通るような青色の空だ。その後ろで輝いている星さえ見えてしまいそうだ。
「相変わらずバカだな、超バカ。ロケットバカ」
「バカバカいうな。空に何かが打ち上がるのを見て、奈留はロマンを感じないの？」
「感じねえよバカ。それより春日の奴が怒ってたぞ。探してすぐに連れてこいって」
「ええ～？　桜ちゃんが？」
春日桜子（かすがさくらこ）先生は、千夏のクラスの担任教師だ。
口うるさい教師で、入学以来、千夏は目をつけられている。彼女の中で、千夏は問題児のカテゴリーに分類されているらしい。
「団体行動が出来ないなんて、学生としてあるまじき事ですって怒ってたぞ」
「桜ちゃんもいちいち細かいよな。そのせいで婚期が遅れてるとも知らずに」
「それ本人の前で言ってみ。大変なことになるから」
奈留はそう言ってポケットから取り出した扇子を広げた。女子高生の持ち物とは思えない、鬼の絵が描かれた渋い扇子だ。

奈留は千夏と同じ学科の同級生で、小学校時代からの古い仲だ。
お嬢様風の内巻きミディアムヘア（あまり似合っていない）にピンク色の髪留め。前髪を長く伸ばして、縁なしの眼鏡をつけている。
外見だけ見れば、大人しい女子に見えなくもないが、こうした地味めの外見はただの飾りに過ぎない。

天王台奈留といえば、元々は手の付けられない不良娘として有名だった。

眼鏡を取って前髪をかき分ければ、他人を竦み上がらせる鋭い両眼が出てくる。
小さい頃から武術を叩き込まれており、逆鱗に触れれば悪鬼羅刹のように暴れ回る。中学校時代の同級生に奈留の名前を出せば、財布を置いて一目散に逃げ出すことだろう。
そんな奈留は高校入学を機に「大人しい女子」にイメージチェンジした。
そして奈留が必死に知恵を絞って出来上がったのが、変なお嬢様風ヘアと伊達眼鏡をつけた残念女子高生だ。高校デビューの失敗例としては珍しい類だろう。
奈留がつけているハート型の髪留めは何度見ても噴き出しそうになる。
一度「頭から毒キノコが生えてるよ」などと冗談交じりで言ったところ、しばらくご飯が食べられなくなるほどのボディブローをお見舞いされた。
しかし、そんな非道い目に遭っても、千夏の中でその面白さは色褪せない。

千夏が奈留の横顔を眺めてにやにやしていると、奈留はおもむろに扇子を千夏の目に突き立てた。

「いぎゃあ！　痛い、何するの」
「何かとてもむかつく解説をされた気がした」
「な、し、してないよ？　そんなの（たぶん）。それに、だからって扇子で目を突くな、目をっ」
「いいだろ、眼球なんて二つあるんだから一つくらい潰れても」
「よ、よくないよ！　何なのその恐ろしい発想は。戦国時代の人か！」
千夏は奈留の扇子攻撃を右手で払った。この女は自分の事になると異常に勘が働く。千夏とは子どもの頃からの付き合いなので、何を考えているのかすぐにばれてしまうようだ。
「ほら、それよりさっさと体育館へ行くぞ」
奈留は千夏の耳をつまんで引っ張った。
「痛い、痛いよ。やだよ全校集会なんて、面倒くさい」
「うるさいな、この問題児め。さっさと来い」
「今更行ったって怒られるだけだし、全校集会って長いぞ～。一時間は立ちっぱなしだよ。一時間！　だったらお茶でも飲んでゆっくりしていこうよ」
千夏が言うと、奈留は動きを止めた。
「お茶……？」
「お菓子もあるよ」
千夏が言うと、奈留は眉間に皺をよせて考え込んだ。
真面目ぶっているが、奈留だって団体行動が苦手な奴なのだ。一時間じっと立っているのはさぞ苦痛だろう。千夏は甘い声でささやく。
「マンガもあるし、いろいろおつまみも用意してるよ。煎餅に、チーズ鱈に、大福もあるぞ。クーラーボックスには生卵も牛乳も何でもある」
奈留はしばらく考えた後、扇子を畳んだ。
「生卵か……。まあ、それなら……」
奈留はぼそりと呟いた。

（え、生卵が決め手なの？）

千夏はそうツッコミたくなったが、ギリギリこらえた。

こうしてミイラ取りをミイラに引きずりこんで、千夏は即席お茶会の準備を始めた。

ロケット日和（2）

大きめのコップに生卵を二つ。そこへスプーン二杯の蜂蜜を入れ、醤油を数滴。あとはコップいっぱいに牛乳を注ぎ込み、よ～くかき混ぜる。

奈留はそうして作った謎の液体を半分ほど飲み干し、大きく息を吐き出した。

「くはっ　やっぱりこれが効くわあ」

「……何なんだよ、その気持ち悪い飲み物は！　何故生卵を飲む。おじいちゃんか、お前は」

「これが健康にいいんだよ」

奈留は自慢げに言った。

千夏と奈留は、屋上のフェンスに二人並んで座っていた。

地面には茶色のタイルが敷き詰められており、その上に千夏が持参したお茶やお菓子が並べられている。太陽の光が染みこんだタイルはほんのり温かかった。

屋上のフェンスに寄りかかると、背中から涼しい風が吹き抜けていった。乾いた風は体に溜まった熱を払っていく。奈留は大きく欠伸をしながら呟いた。

「こうやって屋外でお茶するのも悪くないな」

「そうだな。お前が飲んでるのは全然お茶じゃないけどな」

奈留の欠伸が伝染したのか、千夏も大きな欠伸をした。

千夏と奈留が高校生となったのは、今年の春のことだ。二人とも小学校時代からの腐れ縁で、高校入学後も同じ学科、同じクラスとなった。

二人が通うのは白丘学園（しらおかがくえん）という、生徒数五千人を超える規模の女

子校だ。敷地もそれなりに広く、校内にはいろいろな種類の建物が乱立している。
白丘学園は女子校にしては珍しく、科学、工学を専門とした教育が行われる学校としても有名でもある。
様々な先端技術を取り入れ、学校の施設も普通の学校に比べてシステム化が進んでいる。校内を歩いていても、何に使うかわからないような機器もよく見かけるくらいだ。
屋上から見える大きな体育館は、五千人近い生徒を収容出来るだけあって、普通の学校のものよりずっと大きかった。

「そういえばさ、全校集会って一体何の話してるの？」
千夏はふと疑問に思っていたことを奈留に尋ねた。
全校集会のことを告げられたのは今朝のことだ。千夏はその急な召集が気になっていた。普通、夏休み明けなどに行われることが多いので、時期はずれでもある。
「ああ、それなら『更衣室荒らし』の件についてだよ」
「更衣室荒らしって、例のあれ？」
「そう、学校側も重い問題として受け止めてるんだってさ」
奈留は他人事のように言った。

白丘学園の更衣室が荒らされていたのは、二日前のことになる。
プールの授業や体育の着替えなどで使われる更衣室から、財布や貴重品、水着や下着類が盗まれていたのだ。盗まれた品は１００点以上。二日経った今でも犯人は不明で、盗まれたものも見つかっていなかった。
「ふざけた事件だよな。犯人は何考えてんだか」
「今頃女子高生の下着を抱えて、ハアハアしてるんじゃない」
「リアルなこと言うなよ。まあ、金品も盗られているとはいえ、下着泥棒だから、男が犯人なんだろうな。となるとうちの生徒は除外されるわけか」

「何言ってんの奈留。そんなのわかんないよ～。下着だって売れば金になるし。白丘学園から収穫したてのホヤホヤですっていえば、箔がついて高く売れるかも」
「発想が完全に犯人だな……。お前がやったんじゃないだろうな」
「ち、違うよ！　可能性の一つを話しただけ。まあ、男性教師とか？　後は事務関係の人とかがやった可能性が高いんだろうけどさ」
「でも更衣室付近を男がちょろちょろ歩ってたら、さすがに誰か気づくだろ」
奈留は首をかしげた。それは確かに奈留の言うとおりだった。

白昼堂々行われた大胆な犯行にも関わらず、目撃者がほとんどいない。それは事件の謎の一つでもあった。
更衣室周辺は体育館や屋内プールへの通路に面している。その通路は体育の授業で頻繁に使われるので人通りは多いはずだった。１００点以上の荷物を持ち、誰にも見つからずにそこを歩くのはさすがに無理がある。
腕組みして悩んでいる奈留の横で、千夏はごろりと寝転んだ。
「奈留、そう考えこむなよ、事件ならそのうち解決するからさ」
「何だよ、その根拠のない自信は」
「根拠ならあるよ～ん、ふひひ」
「何を楽観的な……。解決って、誰がどうやって」
「いるじゃない。こういうトラブルが起きたとき、解決してくれる頼もしい人が」
「頼もしい人？」
「そう、学園のトラブルシューターこと、あたし、二宮千夏がね！」
千夏は勢いよく跳ね起き、ビシっと親指を立てた。奈留はしばらくじとっとした視線を千夏に向けてから、小さな声で呟いた。
「トラブルメーカーじゃなくて？」
「違う違う！　シューターの方ね？　解決するほう」
「千夏が事件を解決してる所なんて一度も見た事ないんだが」

「あああもう！　このバカ、芋娘がっ！　見た事のあるものしか信じられないのか？　そんなんだから最近の女子高生はうんたらかんたら……」
「おい、話がすり替わってるぞ」
「とにかく！　この事件はあたしが解決する。その宣言をしに来たんだよ」
　千夏はそう言い切ってから、近くに置いてあった銀色のトランクをひっぱり出した。
「というわけで、もう一発打ち上げるぞ！」
「もう一発って、またロケット？」
「もちろん。何ていうか、一つの宣言なわけよ。開会式に花火を打ち上げるのと同じ。しかも今度はど派手なやつね」
　千夏が胸を張ると、奈留にじろりと睨まれた。
「まさか火薬燃料は使ってないだろうな……」
「わ、わかってるって。使ってないよ」
「今度学校であんなもん飛ばしたら、間違いなく停学だぞ」
「だから今回は安全性を考えて、火薬燃料不要のペットボトルロケットにしたの！　ちゃんと考えてますよ、その辺は」
「まあ、それならいいけど」
「だろ、安心してそこに座ってな。しかも今回のはただのペットボトルじゃないぜ」
　千夏はトランクを開け一本のロケットを取り出した。
「はい、というわけで、今度のペットボトルロケットには花火を百発ほどつけてみました」
「結局火薬じゃねえか！」

　千夏が取り出したペットボトルロケットには、びっしりと花火が巻き付いていた。
　元のペットボトルの表面はもう見えなくなっている。導線は複雑に絡みあって、四方八方に伸びていた。

「ヤバイな～、飛びすぎて航空法に引っかかっちゃうよぉ」
「心配すんな、一メートルと飛ばずに爆散するから」
「それは結果を見てからにしろ！」
千夏は用意したロケットを発射台にセットした。
ポンプを使ってギリギリまで空気を入れ、花火の導火線に着火してから発射レバーを引く。想定通りなら水圧で上空に上がったて数秒後、花火に点火し、その推進力でさらに上空へ上っていくはずだ。

千夏はライター片手に早速発射態勢に入った。
「行くぞ奈留、って、ええ～っ、ちょっと遠すぎでしょ」
さっきまで隣にいたはずの奈留は屋上の入口付近まで後退していた。
「一人で勝手に焦げ死ね」
「失敗前提でひどいこと言うなよ！　見てろよ。カウントダウン開始！」
千夏はライターに火を点けて、発射レバーを握った。
「3、2、1……、行っけぇ～っ！」
導火線に火が点いたのを確認し、千夏はレバーを引いた。千夏のかけ声と共にロケットは上空に飛んでいく。
「よし予想どお……、あれ？」
しかし、真っ直ぐ飛んだのは一瞬だけだった。
ロケットはすぐにバランスを崩し、真横に飛んでいってしまった。屋上からどんどん遠ざかっていく。それを見計らって奈留が千夏の隣へ近づいて来た。
「失敗みたいだな」
「な、まだだっ。これから体勢を立て直すんだ」
そう言ったが、ロケットはすでに失速していた。
「ああっ、千夏7号？　しっかりしろ！」
「ああなったらもう無理だな。っていうかあんなの7個も作ったのか……」

失速したロケットは一直線に屋上の外へ落ちていく。
落下地点にあるのは職員用の駐車場。ロケットは学年主任である田所先生のＢＭＷに向かって落ちていった。
「よりによって田所の新車に向かって飛んでくぞ」
「だ、大丈夫、ペットボトルロケットだから、万が一当たっても、それほどの衝撃には……」
しかし次の瞬間、空気を裂くような甲高い音が響いた。今になってペットボトルから無数の花火が発射したのだ。千夏は思わず目をつぶる。
しばらく爆発音が鳴り響いた。恐る恐る目を開けると、田所のＢＭＷは真っ白な煙に包まれていた。火薬のにおいは屋上まで届いてくる。
「……」
「……」
「……うん、ある意味、成功！」
千夏は陽気に親指を立てて見せた。

ロケット日和（3）

「ウチの生徒が問題を起こして、本当に申し訳ありませんでした！」
職員室に大きな声が響いた。
広々とした職員室はパーティションで仕切られており、教員のデスクがずらりと並べられている。
インスタントコーヒーのにおいが入り交じった独特の空気を、エアコンの風がかき混ぜていた。
「まあ、先生がそこまで謝ることでは……」
「いいえ、これは担任である私の監督不行届です。まさかウチの生徒が先生の車を燃やしてしまうなんて……」
「ま、まあ、ボンネットとフロントガラスが焦げただけですから……」
目の前にはジャージを着た体格の良い男が座っている。
それは学年主任の田所先生だった。くすんだ青に黄色の三本ラインのジャージは、田所の一張羅だ。
そんな田所に頭を下げているのは、千夏の担任の春日桜子（かすがさくらこ）先生だった。
年齢は二十代前半だと言い張っているが、おそらく三十前後ではないかと千夏は睨んでいる。桜子先生は千夏と奈留の後頭部を掴み、強引に頭を下げさせた。
「ほら、二人とも私に続きなさい！　本当に申し訳ありませんでした」
「ホントウニ、モウシワケ、アリマセン、デシタ」
「どうしてカタコトですか！　ちゃんと謝りなさい！」
「まあまあ、春日先生。とりあえず謝罪はいいですから。その、きちんと指導をお願いしますよ、ええ……」
田所はしばらくの間、居心地悪そうに頭を掻いていたが、やがて部活があると言って立ち去ってしまった。

愛車が焦げたのがショックで怒る気力もないようだった。少しはげ上がった頭頂部と、曲がった背中に哀愁が漂っている。
田所が出て行ったのを見送ってから、桜子先生は千夏と奈留の方に振り返った。
言いたい事を山ほどため込んでいる、そんな表情がそこにあった。
「それじゃ、ゆっくりと話を聞かせてもらいましょうか。今回の騒動は、どちらが主犯ですか！　正直に答えなさい」
桜子先生は千夏と奈留に前に立つ。
身長が低いので二人を見上げるような格好になる。桜色に薄く塗られた唇を尖らせながら、上目遣いに二人の様子をうかがっている。
奈留は一つため息をついてから口を開いた。
「そんなの決まってるだろ。もちろん千夏――」
「はい、奈留が主犯です」
奈留が言葉を言い終わる前に、千夏はきっぱりと言い切った。
「そう、天王台さん、あなたなのね」
「ちげえよ、簡単に騙されんな！　全部こいつの仕業だっつの」
「桜ちゃん、桜ちゃん、奈留は『ああ全校集会めんどくせぇ～、ゲへへ』といって屋上で堂々とサボってました」
「何だよ、その似てねえモノマネはっ！　サボってたのはお前だろうが」
「ぎゃあああ、痛い痛い！　離せ、このゴリラ女」
奈留は片手で千夏の頭を掴み、思いっきり締め上げた。
まるで万力で頭を挟まれているような馬鹿力。千夏のこめかみに激痛が走った。
桜子先生は慌てて千夏と奈留の間に入った。
「こら、二人とも止めなさい！　本当に毎回毎回あなたたちは……。そもそも、今回はどういう経緯でこんな騒動を起こしたのか説明なさい！」
「そんな～、いつも面倒事起こしてるみたいな言い方して。桜ちゃ

んのお茶目さん」
「いつもじゃないですか！　入学してから何度目です？　入学早々上級生と喧嘩して相手に怪我させる。水槽の魚をさばいて食べようとする。他の先生のパソコンをいじって勝手にデータを消去する。校庭で火薬ロケットを打ち上げてサッカーのゴールネットを燃やす。他にも数え切れないくらいあります」
桜子先生は自分の膝を叩いた。ストレートの黒髪が乱れている。これはかなりお冠のようだ。
「だいたい何ですかその態度は！　先生を呼ぶときは『春日先生』と呼びなさいと何度も言っているはずです。二宮さん、あなたは今悪い事をして叱られてるんですよ。もう少しそのへんの自覚をですね――」
それから桜子先生の一方的な叱責が続いた。千夏は目をつぶって、それに耐えた。
奈留の方を見ると、明らかに不服そうな顔で腕組みしている。相変わらずこういう反抗的な態度は堂に入っている。

しばらくして桜子先生の話が一瞬止んだのを見計らって、千夏は口を開いた。
「あのですね、今回の打ち上げはですね、例の騒動を解決するための狼煙（のろし）なんですよ」
「例の騒動……？　まさか更衣室荒らしのことですか」
「はい、それですよ、それ！　今回はその更衣室荒らしを捕まえて、盗まれた物を取り返してあげようと思ってるんです、はい」
千夏は堂々とした口調で言った。
これを聞けばさすがに桜子先生も黙るだろう。
学校で起きている問題を積極的に解決しようとする生徒。我ながら素晴らしい生徒だと、千夏は自画自賛した。
桜子先生もさぞ感動しているだろうと思って、ちらりとその様子を覗うと、そこは鬼と見間違うほど目をつり上げて怒る桜子先生の

顔があった。
「更衣室荒らしの件は学校側に任せておきなさいと言ったはずで～す！」
桜子先生はそう叫んだ。
あまりの大声に遠くのデスクで仕事していた教員が驚いて顔を上げたほどだ。
「何度かホームルームでも言いましたよね！　この件は、生徒が首を突っ込んでいい話じゃありません。学校側、場合によっては警察の仕事です。あなたはサボっていたから知らないかもしれませんが、全校集会でもそういう注意喚起があったんですからね」
桜子先生は千夏の耳元で怒鳴り声を上げた。
「桜ちゃ……、あ、春日先生、聞こえてます、聞こえてますから」
「もしかして、このところ、こそこそ校内の更衣室を調べたり、入室記録を漁ったりしているのもあなたたちですね！」
「え、そんなことやったかな……」
「いいえ、あなたで間違いありません！　あなたで間違いありません！」
桜子先生は言い切った。
桜子先生は興奮すると同じ台詞を繰り返して叫ぶという変な癖がある。
もはや学校の全ての悪事が千夏のせいだと言い出しかねないテンションだった。
このようにスイッチが入った状態だと、とても面倒臭い先生なのだ。
「とにかく更衣室荒らしの調査は全面的に禁止！　こうした問題行動は控えてもらわないと。ただでさえ、これからいろいろあるっていうのに……」
「問題行動って、そんな……」
「少しそこで待っていなさい！」
桜子先生はそう告げて、職員室を出て行ってしまった。

千夏はしばらくの間、桜子先生が出て行った扉をじっと眺めていた。
「桜ちゃん、どこへ行ったんだろうな」
「呆れて帰ったんじゃねえの？」
奈留はあくびをかみ殺しながら答えた。
「もしかして、あたしの決意表明に感激して何かお礼を持ってこようとしてるとか？」
「今の会話でそれはあり得ねえだろ！　それよりこの隙に帰ろうぜ」
「あ、それナイスアイデア。桜ちゃんには悪いけど逃げるか」
千夏と奈留が席を立とうとした瞬間、再び扉が開き、桜子先生が現れた。
「まだ帰っていいとは言ってません！」
「げ、聞いてたの？」
「聞いてましたとも！」
桜子先生は再び職員室に入ってくる。どこから持ってきたのか、桜子先生は両手にバケツを持っていた。
そして千夏の前にバケツを差し出した。よく見ると、中には洗剤やたわしなどの掃除用具が入っている。
「あ、掃除用品は間に合ってるんで……。気持ちは嬉しいんですがお返しします」
「別にあげるわけじゃありません！」
桜子先生は首を振ってこう言い放った。
「あなたたちには罰としてプールサイドの掃除をしてもらいますからね！　そう、プールサイドの掃除をしてもらいますから！」

◇◇◇

「ああ……、面倒くさいなあ、もう。早く帰ってゴロゴロしたいのに」
「お前のせいなのに、何でこっちまで巻き込まれないとならないんだ。ったく」
奈留はデッキブラシで床を磨いていた。乱暴にこするので、奈留の足下には大量の泡が落ちている。
千夏はホースで水をかけて、奈留の足下の泡を払った。
「仕方ないだろ、文句なら桜ちゃんに言えよ」
二人は校内の屋内プールで掃除をしていた。
そこは２５ｍ用、５０ｍ用、飛び込み用のプールが三面用意されているプールで、天井は透明なドームになっている。
ドームを通して見える空は、夜になる一歩手前の淡い紺色に染まっていた。
「お前、本気で更衣室荒らしの件、調べるつもりか」
「あったり前だろ。トラブルを見て見ぬ振り出来るか。他人に迷惑をかけるなんて許せない」
「お前は、今日あたしにどれだけ迷惑かけたと思ってんだ、コラ」
奈留はそう言って千夏の右頬に拳を押しつけてくる。
「にゅにゅ……、だっれ、今回のはしょうがないじゃないか。まさかああなるとは……」
「まったく、貴重な放課後を無駄にしたし」
「何だよ、奈留は部活も何もやってないくせに……」
「お前もだろ。あたしはゲームしたり、撮り溜めておいたアニメを見たりと忙しいんだ」
「ちっ、インドアヤンキーめ……」
千夏が小声で呟くと、奈留の蹴りがすっ飛んできた。
千夏は咄嗟に体を反らして避ける。奈留の踵が鼻先をかすめていった。
「次ヤンキーって言ったら、その鼻潰す」
「発言が怖いよ！　っていうか今避けなかったら潰れてたよ！」

「あ、そうか。変に血とか出されたら、床が汚れて掃除が面倒か……」
「そ、そういう問題じゃないだろ！　床の汚れとかじゃなくて……」
「ほら、いいからさっさと掃除しろ」
「言われなくてもわかってるよ！」
二人は黙々と掃除を続けた。

「それにしてもさ、一つ気になったんだけどさ。さっき桜ちゃんが言ってた、更衣室や入室記録を調べてるのって奈留がやったの？」
しばらくして千夏は思い出したように話はじめた。
「知らねえよ。お前じゃないのか？」
「あたしはそんな事してないよ」
「じゃあ、お前以外にも事件を追ってる人間がいるってことか？」
「う～ん、でも、この件に関わるような生徒はいないと思うんだけどな」
千夏はそう言って考え込んだ。
今回被害に遭ったのは、ほとんどが一年生だった。
正確に言うと、ちょうどその時体育の授業をしていた、一年一組から三組の生徒が対象だ。
桜子先生も言っていたとおり、今回の件は生徒が首を突っ込まないように、学校から注意も出ている。おそらく犯人が教員や事務員ではないかという疑惑が強いからなのだろう。
その状況下で積極的に事件解決に動くような生徒はぱっと思いつかなかった。
「まあ別に気にすることじゃないだろ。ほら、これで掃除終わりだ」
奈留はそう言ってデッキブラシで床を叩いた。早く水を流せという合図らしい。
千夏は奈留の足下にホースを向けた。水で流すと茶色く汚れた泡が流れていく。これで大体の床は磨き終わったことになる。
「あとは水を切って終わりかな。さっさと帰ろう」

「ここまでやれば、文句はいわれないだろ」
時計を確認すると、すでに時刻は十九時近くになっていた。二人は掃除用具をしまい、プールサイドを後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2895ba/

ロケット日和

2012年1月9日12時51分発行